

令和8年産米の重点技術対策

新潟県農林水産部

令和7年は異常高温の中で平年並みの収量や1等級比率が確保されましたが、一部の地域では初期生育の遅れや穂肥不足が収量や等級の低下に影響を及ぼしていることが課題として残りました。

ここでは、令和8年度の重点技術対策をお示ししますので、異常気象に備え、初期生育確保や後期栄養確保などを着実に実践し、良食味・高品質な新潟米を安定的に生産しましょう。

1 初期生育確保のための適正管理と生育制御

(1) 育苗

ア 健苗を移植できるよう、移植日から逆算し、苗の種類や播種量に合わせた適正育苗期間となる播種日を決めましょう。

イ 温度計を設置し、こまめな温度管理を行い、健苗育成に努めましょう。ヤケ苗防止には高温対策被覆資材の使用が有効です。

(2) 本田管理、施肥

ア 移植後の「ワキ」の発生を抑えるため、ほ場が乾いた状態で耕うんしましょう。

乾きにくいほ場は、排水溝を掘るなどして、表面排水を促しましょう。

イ 基肥の施用が早すぎると、基肥の窒素成分の損失により施肥量が不足し、初期生育に影響します。初期生育確保のため、基肥施用日と移植日の間をできるだけ空けないようにしましょう。

(3) 移植～水管理

ア 分げつの発生を促すため、深植えとならないよう、深さ2～3cm程度に植えましょう。また、活着後は浅水で管理しましょう。

イ 「ひこばえ」や雑草など分解の早い有機物を春にすき込み、高温・多照となった場合に「ワキ」が多く発生します。「ワキ」の発生による初期生育の停滞が見られたら、一時的に落水することで根に酸素を送り、生育を回復させましょう。

ウ 一時的に落水する場合は、除草剤の効果を維持するため田面の湿潤を保つようにしましょう。

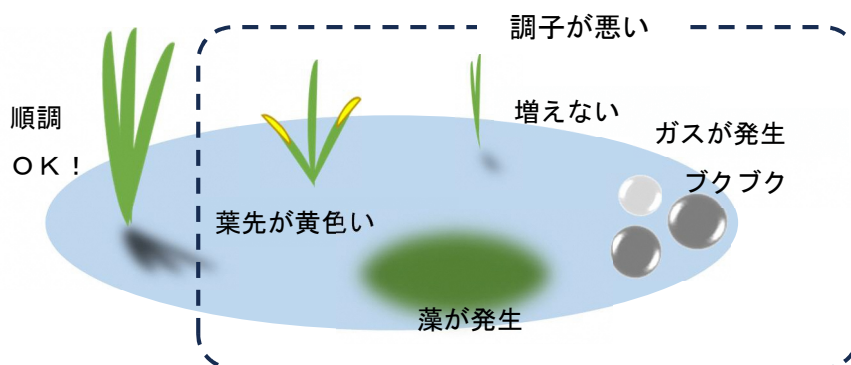


図1 稲や田の状況から落水を判断するめやす

(4) 中干し、溝切

ア 中干しは、茎の増え過ぎや草丈の伸びを抑え、土壌へ酸素を供給し根張りを良くする効果があります。田植え 25 日後に生育を確認し、目標穂数の 7～8 割の茎数となったなら直ちに中干しを開始し、遅くとも田植え 30 日後をめやすに開始しましょう。

イ 中干しの効果を高め、緊急時のかん水を迅速に行うため、溝切りも行いましょう。

ウ 中干し終了時期が遅すぎると根域が縮小し、高温年では品質に影響を及ぼすため、遅くとも出穂期 1 か月前をめどに中干しを終了しましょう。

2 施肥管理による後期栄養の確保

(1) 品種に応じた適正施肥

品種の特性に応じ、後期栄養を確保できる施肥設計としましょう。また、生育の状況を把握し、適期に適量の穂肥を施用しましょう。

(2) コシヒカリの生育診断と穂肥施用の考え方

ア 分施体系の 1 回目穂肥

幼穂形成期に生育診断を行い、量と時期を判断し、倒伏や籾数過剰を防ぎましょう。

イ 分施体系の 2 回目穂肥

後期栄養を確保するため、出穂期 10 日前頃の葉色から施用量を判断し、必ず施用しましょう。出穂期 10 日前以降の穂肥は節間伸長に影響せず、倒伏を助長する心配はありません。

ウ 全量基肥体系

有機 50% 入り肥料を用いた全量基肥体系の場合は、穂肥時期に溶出する窒素量が少ないため、出穂期 18～10 日前頃に穂肥の不足分を追肥しましょう。

エ 緊急追肥対応（分施体系、全量基肥体系共通）

登熟期間の高温に対応するため、緊急追肥対応（分施体系の 3 回目穂肥や全量基肥体系での出穂期前追肥）の要否を、葉色と気象庁の 1 カ月予報から判断し、必要に応じ追肥しましょう。

表 1 コシヒカリの生育診断と穂肥施用の考え方

生育診断時期	生育診断項目等 (主な調査項目と判断項目)	施肥時期	分施体系	全量基肥体系	
			基肥＋穂肥 2 回を施用	化学合成肥料 100% (穂肥を 2 回省略可) *	有機 50% 入り (穂肥を 1 回省略可) *
幼穂形成期	葉色と草丈、気象予報等で施用有無・施用量・時期を判断	出穂期 18～15 日前頃	1 回目穂肥	—	追加穂肥 (不足分の補填)
出穂期 10 日前	葉色で施用量を判断	出穂期 10 日前	2 回目穂肥		
出穂期 10～3 日前頃 **	葉色と気象予報で施用有無を判断	出穂期 10～3 日前頃 **	(3 回目穂肥) 1 カ月予報が高温の場合の	(追肥) 緊急追肥対応	(追肥)

* : 分施体系と比較した場合

** : 施肥体系や肥料の種類により異なる

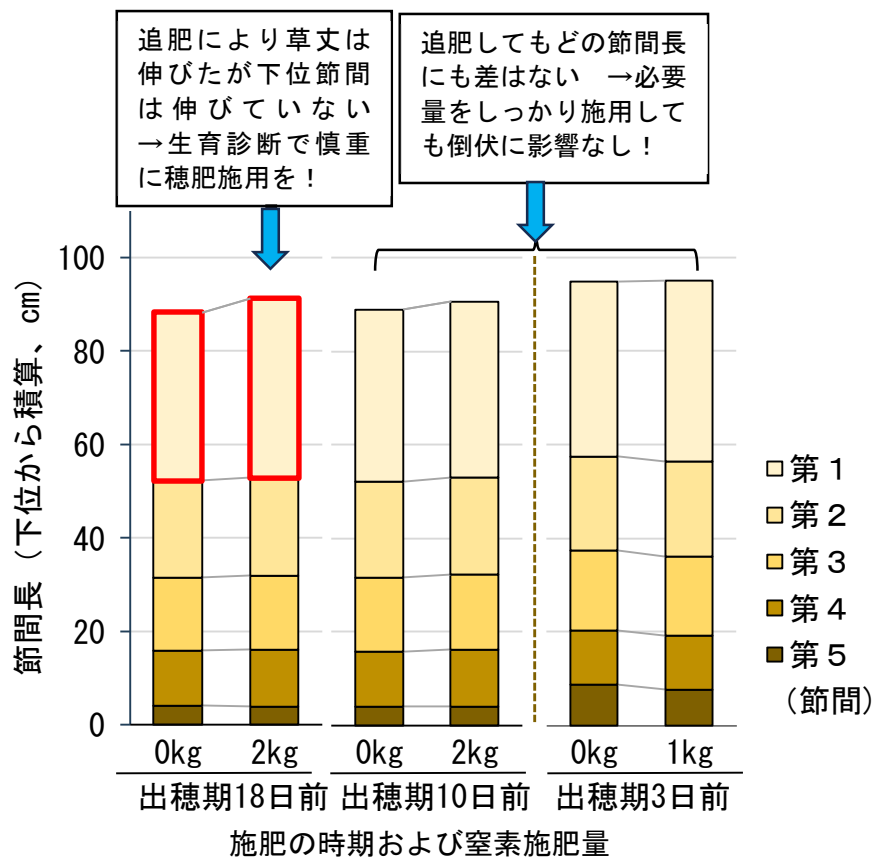


図2 コシヒカリの施肥時期、施用量と節間伸長程度

※基肥・出穂期18日前・10日前穂肥：平成27年、3日前穂肥：令和6年

※肥料の量は10a当たりの窒素量（農業総合所作物研究センター）

3 中干し終了以降の水管理による後期栄養の維持

（1）飽水管理の実施

ア 地温上昇を抑えるとともに根腐れを防ぐために、中干し終了以降は飽水管理を行いましょう。

イ 異常高温やフェーン等の高温乾燥風が予想される場合は、高温・乾燥条件が続く間、土壌が湿った状態を維持できるように、用水の状況に合わせて事前に水を入れましょう。限りある用水を有効に活用するため、水が行き渡ったら速やかに水口を閉めましょう。また、暑い時期の溜め水は根腐れの原因となりますので、長期間水を溜めないようにしましょう。

（2）落水時期

ほ場の落水時期は出穂期25日後以降とします。ただし、高温が予想された場合は、出穂期30日後まで飽水管理を継続するか、かん水可能期間の最終日に十分湛水するとともに、暗渠栓の開栓を遅らせ、土壌水分を保持しましょう。

（3）地域全体での用水利用

緊急時に地域全体のほ場に水が行き渡るよう、効率的な用水利用について事前に地域で話し合いをしましょう。

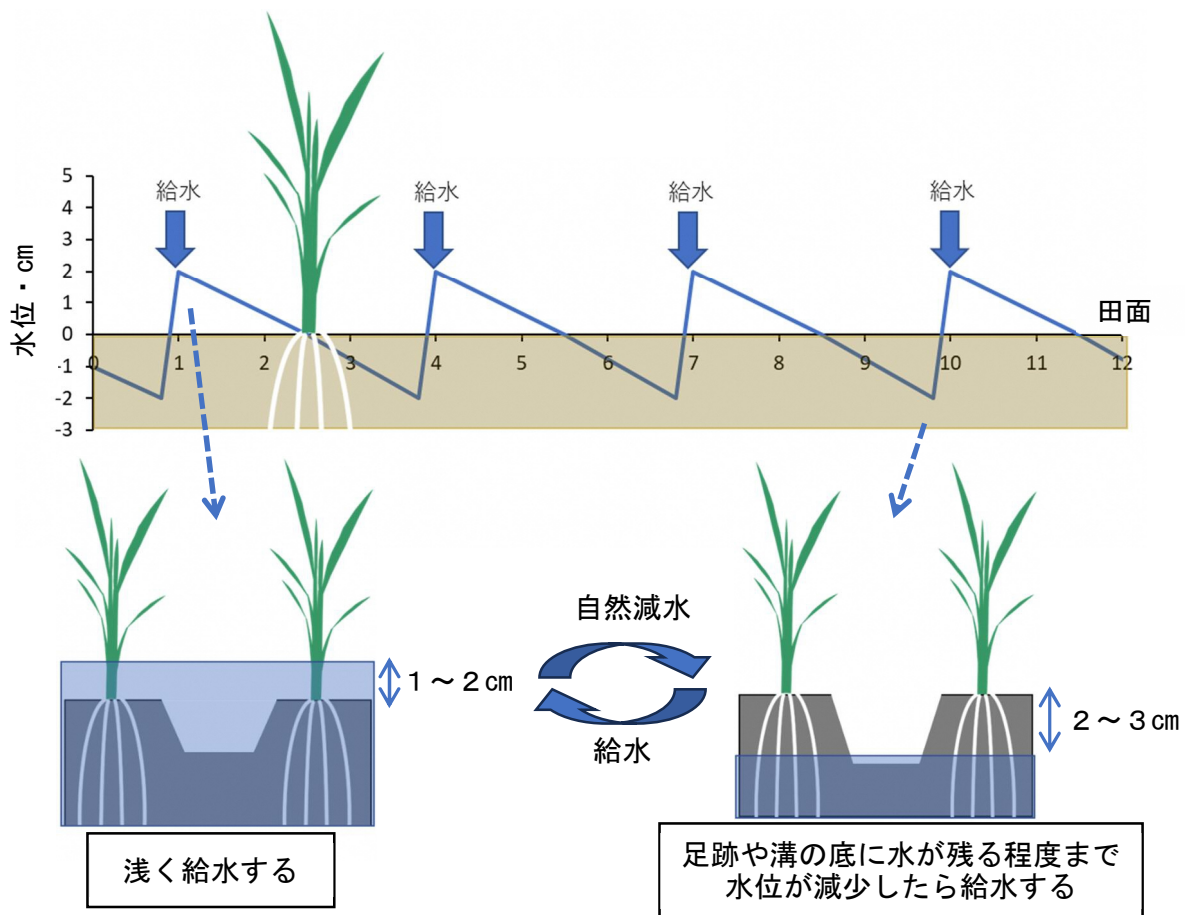


図3 飽水管理のイメージ

4 適期収穫と適正乾燥・調製

(1) 収穫適期の判断

- ア 地域の技術情報や出穂後の積算気温、最新の気象情報、籾黄化率に基づいて収穫適期を判断しましょう。
- イ 茎葉や穂軸は青くても籾は成熟している場合があるので、必ず穂を確認し、籾の黄化率が85~90%になった頃に収穫しましょう。
- ウ 登熟期間に高温が続いた場合は、収穫適期が早まるとともに、適期の期間も短くなります。また、コシヒカリは刈遅れると基部未熟粒が増加し、整粒歩合が低下します。早めに収穫の準備を行うとともに、籾の様子をこまめに観察し、刈遅れを防止しましょう。

(2) 高温乾燥時における胴割粒の発生防止

- ア 収穫期直前に空気が乾燥すると、胴割粒が増加します。空気が著しく乾燥した場合には、県の情報等を参考に、できる限り速やかに収穫を始めてください。
- イ 収穫籾の乾燥作業では、通風循環により水分ムラを解消させてから加熱乾燥する、乾燥速度を下げる等、丁寧な乾燥により胴割粒の発生を防ぎましょう。

(3) 適正な調製による整粒歩合の向上

- ア 整粒歩合を高めるため、粒大に応じて適切なふるい目を使用しましょう。
- イ 未熟粒や着色粒、カメムシ類による斑点米の発生が多い場合は、色彩選別機を利用しましょう。

5 土づくり

(1) 土づくり資材の施用

土壌診断に基づいて堆肥や土づくり資材（リン酸質資材やケイ酸質資材、含鉄資材等）を施用し、地力を増強し適正な土壌 pH にしましょう。特にケイ酸は高温で発生しやすい白未熟粒の発生を抑制する効果がありますので、積極的に施用しましょう。

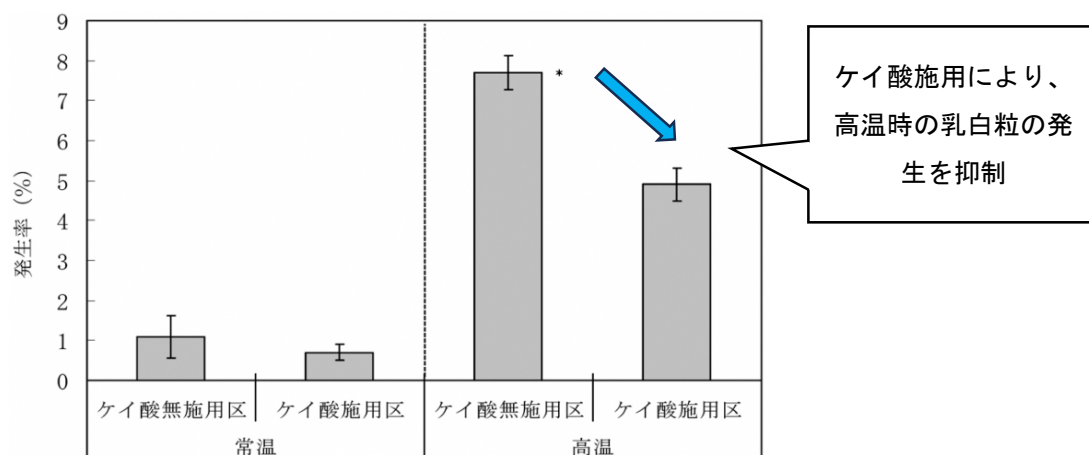


図4 ケイ酸施用が乳白粒の発生率に及ぼす影響

(2011 年, ポット試験) (金田、2018)

(2) 籾殻の施用

籾殻はケイ酸を約 2 割含む有用資源ですので、積極的に施用しましょう。籾殻の施用量は 10 a 当たり 120～250 kg 程度とし、専用散布機等を利用して均一に散布しましょう。

(3) 稲わらの秋すき込み

ア 秋すき込みの効果

稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の「土づくり」効果が期待できます。また、春すき込みと比べ「ワキ」や温室効果ガスの発生が抑制されます。近年は、秋期の高温により「ひこばえ」が大きくなりやすいので積極的に秋すき込みを行いましょう。

イ 施用時期、留意事項

稲わらの分解を促すため、すき込みは収穫後できるだけ早く、気温の高い時期に行いましょう。水が溜まりやすいほ場では、排水溝の施工などにより表面排水を促しましょう。但し、排水性が極端に悪く、春作業に支障がでるほ場ではすき込まないようにしましょう。

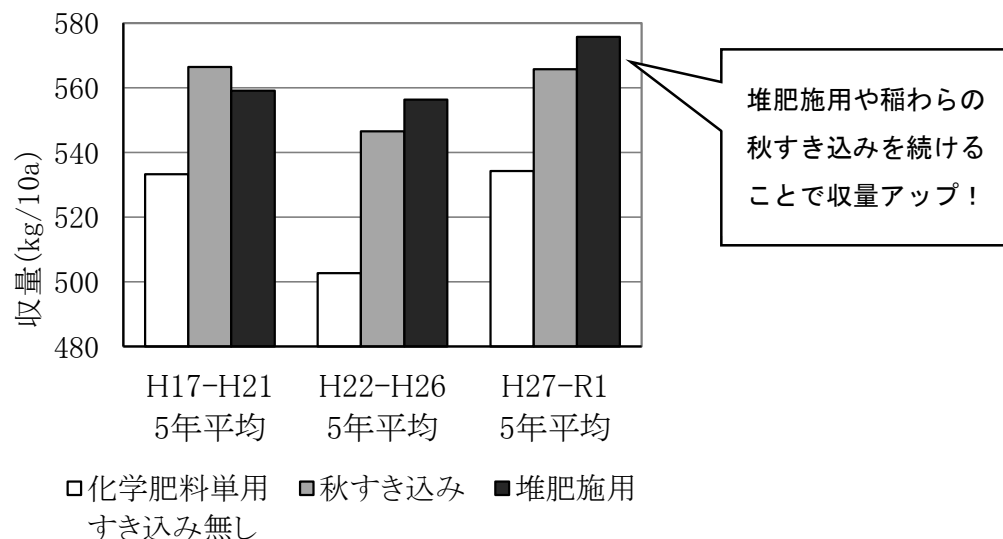


図5 有機物長期連用による収量推移
(H17年～R元年、農総研基盤)
※コシヒカリ 場内・現地の2ほ場平均

6 リスク管理を考慮した作付計画の作成と実践

収穫期の分散や異常気象に遭遇するリスクを分散するため、直播栽培の導入や移植時期の拡大に取り組みましょう。品種構成では、熟期の異なる品種や高温に強い品種を導入しましょう。

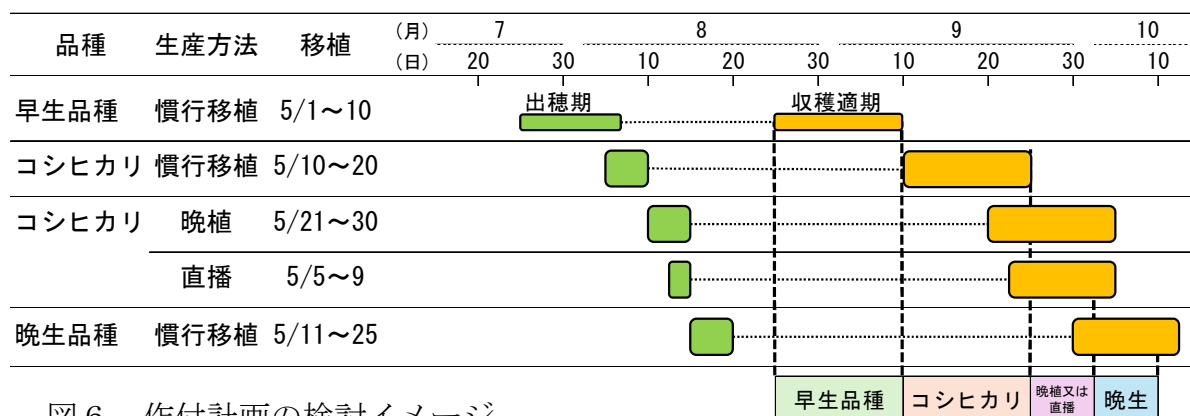


表2 品種別の熟期と高温耐性のめやす

	極早生・早生	中生	晩生
強	新潟135号		新之助
やや強	ゆきん子舞、こしいぶき	にじのきらめき	
中	葉月みのり、つきあかり ゆきの精、ちほみのり		あきだわら、みずほの輝き
やや弱		コシヒカリ	
弱	新潟次郎		

7 農作業安全の確保

(1) 熱中症予防対策

気温が高く、特に湿度が高い場合は熱中症発生のリスクが高まります。農作業中は、熱中症予防対策を必ず行い、健康管理に十分注意しましょう。

(2) 作業環境の整備

危険な場所には目印を立てる等、作業前の周囲の安全確認を行うとともに、ゆとりある作業をこころがけましょう。作業はできるだけ二人以上で行い、やむを得ず一人で作業する場合は、家族などへ行き先を告げるとともに、緊急時に連絡がとれるよう、携帯電話を身につけておきましょう。

(3) 農業機械作業時の安全対策

農業機械を運転するときは、シートベルト・ヘルメットを必ず着用した上で、安全面に配慮し事故防止に努めましょう。公道走行する場合は、法令を遵守しましょう。また、機械の点検・清掃時には必ずエンジンを停止し、巻き込みに十分注意しましょう。草刈りの際は、防護メガネ等の保護具を装着しましょう。万が一に備え、労災保険等へ加入しましょう。

